

デロニクスの育て方

Delonix

マメ科 / Fabaceae

鳳凰木（フレイムツリー）と塊根コーデックス—二つの顔を持つ熱帯のマメ科植物。硬実種子の前処理さえ押さえれば、実生から幹の肥大までたっぷり楽しめます。

基本データ

🌱 成長期

夏型（春～秋生育、落葉して冬は休眠）

🌡 耐寒温度

最低5℃が目安（霜厳禁・園芸情報）

☀ 日照

日なた（強い日照を好む）

📅 播種適期

3～5月（春～初夏）

🕒 発芽日数

前処理後25～30℃で1～2週間（無処理は25～30日）

📍 主原産地

マダガスカル中心（東アフリカ・インド～アラビアにも）

📏 難易度

概要・魅力

デロニクス（**Delonix**）は、マメ科ジャケツイバラ亜科に属する落葉性の熱帯植物です。マダガスカルを中心に東アフリカ・アラビア半島・インド西部にかけて12種が知られており、うち10種がマダガスカル固有種というユニークな分布を持ちます。日本では「**鳳凰木（ほうおうぼく）**」の名で親しまれる *Delonix regia* が最も有名ですが、近年の塊根植物（コーデックス）ブームとともに**幹基部が大きく膨らむコーデックス種の実生育成**にも熱心な愛好家が増えています。大輪の花木としての顔と、年々育つ塊根の造形美—一つの属に二つの魅力が同居するのがデロニクスの真骨頂です。

鳳凰木（*D. regia*）は世界三大花木の一つに数えられる大高木です。直径15cmに達する朱赤の大輪花が木冠を覆い、まるで炎が燃え上がるような景観から英語では「フレイムツリー（Flame Tree）」とも呼ばれます。野生地ではマダガスカルの石灰岩乾燥林に自生し、樹高は10～15m、傘型に広がる樹冠が大きな陰影を生み出します。熱帯・亜熱帯では世界各地の街路樹として広まり、日本でも沖縄ではその鮮烈な朱赤の花が夏の風物詩になっています。本土では鉢植えて管理し、季節の移ろいとともに葉を広げ、落葉させるリズムを楽しみます。実生からの開花には7～10年ほどかかるかとされていますが、そのぶん待ち望んだ花が咲いた瞬間の喜びはひとしおです。

コレクターの間で特に人気を集めるのが、**マダガスカル南西部に自生するコーデックス種**です。長い乾季を生き抜くために幹基部～幹に水分を蓄える形態を進化させており、実生から育てるにつれてじわじわと膨らんでいく幹を観察する楽しみは、サボテンや他の塊根植物に通じる独特の魅力があります。種によって個性もさまざまです。

- ***D. decaryi***：幹径が最大80cmに達する瓶型の幹と、剥がれ落ちる灰色の樹皮が特徴的。白い芳香花と赤いスタメンのコントラストも美しく、矮小～灌木型で鉢栽培に向く。

- ***D. pumila***：樹高3m以下のコンパクトな草姿で石灰岩低木林に自生。夜咲きの花が蛾を引き寄せる夜行性の受粉スタイルも個性的で、コレクター人気の高い種。
- ***D. floribunda***：黄緑色の大きな花序が印象的なマダガスカル西～南西部の乾燥林産。比較的入手しやすい。
- ***D. leucantha***：マダガスカル南西部に自生する乾燥低木型。コンパクトな樹形と白花が持ち味。

デロニクス属はマメ科植物であり、サボテンや多肉植物に見られるような特殊な光合成経路とは異なり、通常の葉で活発に光合成するC3型の植物です。コーデックス形態はあくまで乾季の水分を幹に蓄えるための形態的適応であり、本体は「しっかり葉を広げて成長する植物」です。春～秋は日照と水を十分に与えて旺盛に育て、落葉した冬は断水気味に休眠させる—この季節のメリハリが管理の軸になります。落葉後の枝ぶりや、翌春に吹き出す新芽を毎年楽しめるのも、長く付き合える魅力の一つです。

SEEDSTOCKでは *D. decaryi*・*D. pumila* をはじめとするデロニクス属の種子を取り扱っています。種から育てる幹の肥大を年単位で追いかける実生体験は、この属ならではの醍醐味です。次の発芽ガイドを参考に、ぜひ最初の一粒を蒔いてみてください。

🌞 置き場所

デロニクスは**強い日照を好む植物**で、1日6～8時間以上の直射日光が理想です。日当たりが不十分だと枝が徒長して軟弱な株になり、病害虫への抵抗力も低下します。一方で耐寒性が低く霜に特に弱いので、季節に応じた置き場所の切り替えが欠かせません。

春（3～5月）

最低気温が安定して10℃を上回るようになったら、屋外の最も日当たりのよい場所（南向きベランダや庭の日向）に移します。寒の戻りには注意し、夜間の気温が10℃を下回る予報が出たら室内に引き込みましょう。

夏（6～9月）

生育期の本番です。屋外の直射日光下でのびのびと育てましょう。日照が強いほど充実した株になり、コーデックス種では幹の肥大も促されます。日本の夏は高温多湿になりやすいため、風通しを確保して蒸れを防ぐことが重要です。梅雨時～長雨の時期は鉢土が乾きにくくなるため、屋根のある場所に移動するなど雨水が直接鉢に当たらない工夫をしましょう。

秋（10～11月）

最低気温が10℃前後に下がり始めたら室内への取り込みを開始します。気温の低下とともにデロニクスは自然と葉を落とし始めます。落葉が進むにつれて水やりも徐々に控えていきましょう。

冬（12～3月）

霜は一度でも当たると致命的なダメージを受ける可能性があります。最低気温5℃以上を維持できる明るい室内または温室で管理してください。室内でも南向き窓際など日照を確保できる場所を選び、できるだけ光を当てましょう。関東以北での屋外越冬は基本的に不可と考えてください。

短時間であれば0℃前後に耐えることができる個体も報告されていますが、これは成木の話です。鉢植えの幼苗は低温に対してより敏感なため、「最低5℃以上・霜は厳禁」を守るのが安全です。秋から水やりを徐々に減らして株を乾燥気味に締めることで、多少の耐寒性が向上するという栽培家の報告もあります。

○ 水やり

デロニクス栽培で最も多い失敗が過湿による根腐れです。特にD. decaryi・D. pumilaなどの塊根種は過湿に弱く、「用土が十分に乾いたらたっぷり与える」のメリハリを徹底することが健康な株を作る基本です。鉢底から水が流れ出るまでしっかりと与え、受け皿に水をためたまにしないことも必須です。

生育期（4～9月）

用土の表面だけでなく鉢の中ほどまで乾いてから、鉢底から水が流れ出るまでたっぷりと与えます。夏の酷暑時は日中の高温を避け、朝から夕方までの涼しい時間帯に水やりをしましょう。鳳凰木（D. regia）の幼木は乾燥しすぎると萎れやすいため、用土が長期間完全に乾き切った状態が続かないように気をつけます。コーデックス種は幹に蓄えた水分でしばらく乾燥に耐えられますが、長期乾燥は根にダメージを与えます。梅雨の長雨が続く

時期は鉢土が乾きにくいため、水やりの頻度を意識的に落としましょう。

秋以降（10～11月）

気温が下がり葉の色が変わり始めたら、水やりの頻度を徐々に落とします。落葉が進むにつれてさらに水を控え、休眠準備を促しましょう。

休眠期（12～3月）

完全に落葉したら基本は断水です。ただし鉢内の細根が完全に枯れるのを防ぐため、月に2～3回ほど少量の水を与えるのが推奨されます。冬の水やりは天気の良い暖かな日の午前中に行い、夜間までに鉢土が乾くようにしましょう。低温＋過湿の組み合わせが根腐れの最大リスクです。春の芽吹きが始まったら、徐々に頻度と水量を元に戻していきます。

「水やりに迷ったらもう2～3日待つ」くらいの感覚が安全です。デロニクスは乾燥に対して思った以上に粘り強い植物です。水のやりすぎによる根腐れは、少し乾かしすぎるミスよりずっと回復が難しい失敗です。

🔧 用土・植替え

デロニクスには排水性の高い用土が欠かせません。湛水・過湿の環境は根腐れを招くため、無機質中心の水はけのよい配合を基本とします。特にコーデックス種（D. decaryi・D. pumila など）は過湿に弱く、用土の選択が健康な幹の肥大を左右します。

用土の配合例

- ・ **手軽な方法**：市販のサボテン・多肉植物用培養土をそのまま使用する。保水性が高すぎると感じたら軽石を3～4割追加して排水性を補強します。
- ・ **自家配合（推奨）**：赤玉土（小粒）4＋軽石（小粒）3＋鹿沼土（小粒）3の無機質中心配合。有機分を加えたい場合は腐葉土を全体の1～2割程度に抑えましょう。
- ・ **実生用**：赤玉土（細粒）5＋バーミキュライト3＋軽石2など、細粒で根が張りやすい配合。実生では有機肥料や堆肥を入れないほうがカビの発生を抑えられます。

鉢は素焼き鉢や底穴のある通気性のよい鉢を選びましょう。受け皿に水をためたまにしないことも根腐れ予防の基本です。D. decaryi・D. pumilaの塊根を太らせたい場合は、あまり大きくすぎない適度なサイズの鉢のほうが乾湿のメリハリがつきやすく、徒長防止にも有利です。

植替えの時期と頻度

植替えの適期は春（新芽が動き始める前後、4～5月）です。真夏と冬の植替えは根へのダメージが大きいため避けましょう。根が鉢底穴から出始めたとき、または購入・実生から1～2年経過したタイミングが植替えの目安です。植替え時は古い土を根鉢から軽く落とし、傷んだ根は清潔なハサミで除去します。植

替え後は数日～1週間ほど水やりを控えて根の定着を待ちましょう。

鳳凰木（D. regia）は直根性が強く、根が鉢底を勢よく巻くことがあります。定期的に根の状態を確認し、根詰まりを起こす前に植え替えることが大切です。根は全体の3分の1程度の剪定に耐えます。

🌱 発芽のさせ方

デロニクス属の種子は硬実種子（hard seed coat）で、不透過性の種皮による「物理的休眠」を持ちます。何も処理をしなければ土中で何年も発芽しないことがあり、播種前の前処理（スカリフィケーション）がほぼ必須です。前処理をきちんと行うことで、発芽率は無処理時の20～45%から、物理的処理では98～100%近くに大幅に改善することが複数の研究で確認されています。SEEDSTOCKが推奨する前処理と播種の手順を詳しく解説します。播種の適期は気温が安定する3～5月（春～初夏）です。

前処理（スカリフィケーション）の種類と選び方

デロニクスの種皮には「水の通り道（ウォーターギャップ）」があり、自然条件では熱や物理的な摩擦によってこの通り道が開いたとき初めて吸水・発芽が始まります。人工的にこの過程を再現するのがスカリフィケーションです。方法は大きく「物理的処理」と「温湯処理」の2種類があり、組み合わせると最も効果的です。

- **物理的処理（ニッキング・研磨）**：爪切りやニッパーで種皮の一部に小さな切り込みを入れる、またはサンドペーパーで種皮を薄く削る方法。発芽率98～100%と最も確実な方法です。種のへそ（種臍）側は胚が集中しているため傷つけないように注意し、反対側の端が側面を削るのが基本です。
- **温湯～熱湯浸漬**：80～90℃の熱湯（沸騰後少し冷ました湯）に種子を入れ、そのまま自然冷却しながら24～48時間浸漬する方法。種皮が緩んで吸水が促されます。浸漬後に種子がふっくらと膨らんで沈んでいれば吸水完了のサインです。

最も確実なのは物理的処理のあとに温湯浸漬を組み合わせる方法です。温湯浸漬のみでも高い効果が期待できますが、物理的な傷を入れてから浸漬することで吸水がさらに安定します。

播種の手順

1. **用土を準備する**：赤玉土細粒・バーミキュライト・軽石などを混合した水はけのよい用土を播種トレーや浅鉢に入れ、全体がしっとりと湿る程度に水やりしておきます。実生では有機分の少ない清潔な用土がカビのリスクを抑えます。
2. **スカリフィケーション（物理的処理）を行う**：爪切りやサンドペーパーで各種子の側面または先端の種皮に小さ

な傷を入れます。種臍（へそ）側を傷つけないよう注意しながら、反対側の端を削るイメージで行いましょう。

3. **温湯に浸漬する**：80～90℃の熱湯に種子を入れ、そのまま自然冷却させながら24～48時間浸け置きます。時間経過後に種子がふっくらと膨らんで沈んでいれば吸水完了です。浮いたままの種子は前処理が不十分な可能性があるため、再度傷を深めて再浸漬を試みましょう。
4. **播種する**：吸水して膨らんだ種子を用土の上に並べ、種の厚みと同程度（約5～10mm）の覆土をします。種子どうしが重ならないように間隔を取りましょう。
5. **温度と湿度を管理する**：播種トレーをビニール袋や透明蓋で覆い、高湿度（80～90%以上）を保ちます。発芽適温は25～30℃。温度が低いと発芽が大幅に遅れるため、温度が不安定な時期はヒーターマットや温室を積極的に活用してください。強い直射日光は避け、明るい半日陰に置きます。
6. **発芽を待つ**：前処理をしっかりと行った場合、おおむね1～2週間で発芽が始まります（無処理では25～30日以上かかることもあります）。条件が整えば数日で動き出す個体もあります。発芽後はビニール覆いを少しずつ開けて通気を確保しましょう。
7. **発芽後の管理**：発芽直後は直射日光を避け、明るい半日陰で管理します。本葉が1～2枚展開したら個別の鉢に鉢上げし、通常の生育管理へ移行します。塊根種（D. decaryi・D. pumila）は幼苗のうちからすでに根元がふっくらと膨らみ始めるので、その変化を観察することも実生育成の大きな楽しみです。

SEEDSTOCKの種子でも、硬実種子の性質上、前処理なしでの発芽は不安定です。スカリフィケーション＋温湯浸漬のひと手間をかけることで、発芽の確実性が大きく上がります。浸漬後に種子が膨らんでいることを必ず確認してから播種してください。

実生1～2年目の幼苗は成株に比べて根腐れしやすい時期です。用土はなるべく乾かし気味に管理し、過湿を避けることが丈夫な株への近道になります。幼苗期を乗り越えれば、その後の管理はぐっと安定してきます。

🐛 病害虫・トラブル

デロニクスは管理が適切であれば比較的丈夫な植物ですが、過湿・日照不足・低温が大半のトラブルの根本原因になります。早めにサインを見つけて対処することが、株を長く健康に保つ近道です。

根腐れ（最重要）

水のやりすぎと排水不良が主な原因です。特に塊根種（D. decaryi・D. pumila）は過湿に弱く、幹基部や根が柔らかくなる・変色するといった症状が出たら根腐れを疑いましょう。腐

った部分を清潔なカッターで除去し、切り口を数日間陰干ししてから新しい清潔な用土に植え直します。重症化した場合の回復は難しいため、排水性の高い用土の使用と「乾いてから水やり」の徹底が最善の予防策です。

害虫

- **アブラムシ**：新芽や柔らかい茎に群生して吸汁します。見つけたら市販の殺虫剤（ニームオイルも有効）で早めに対処しましょう。
- **カイガラムシ**：葉裏や茎に付着して吸汁します。発生数が少ない場合はアルコールを含ませた綿棒で拭き取り、広がった場合は殺虫剤を使用します。
- **ハダニ**：乾燥・高温の条件で発生しやすく、葉に白い細かな斑点が出ます。一般の殺虫剤が効きにくいいため専用の殺ダニ剤を使用します。葉への定期的な霧吹き・散水が予防に有効です。

よくあるトラブル

- **徒長（間延び）**：日照不足が最大の原因です。枝が細く間延びした場合はできるだけ日当たりのよい場所に移動してください。いったん徒長した部分は元には戻りません。
- **低温障害・落葉**：5℃以下の環境や霜にあたると葉・茎が傷みます。急な室内への移動による環境変化でも落葉が起こることがあります。最低5℃以上を維持し、置き場所の変更は徐々に行いましょう。
- **茎・枝の枯れ込み**：樹皮に病変が出て枝や幹が枯れ込む場合があります。患部を見つけたら清潔なカッターで除去し、殺菌剤を使用します。傷口からの感染を防ぐため道具は消毒してから使いましょう。
- **実生時のカビ（立ち枯れ）**：播種後の過湿・通気不良で種子や幼茎にカビが発生します。ダコニールやベンレートなどの殺菌剤を予防的に散布し、カビが出た種子は速やかに取り除きましょう。

梅雨～夏の多湿期は鉢土が乾きにくく、根腐れやカビが出やすい時期です。軒下やベランダの屋根のある場所に置くなど、雨水が直接鉢に入らない工夫をしましょう。日本の高温多湿の夏をうまく乗り越えることが、デロニクス鉢植え管理の最大のポイントです。



デロニクスの種子を探す
QRを読み取る／seedstock.jp

栽培メモ